ルーマニア語の数詞に於けるスラブ語の影響

安達万里子　博士過程前期１年

はじめに　ルーマニア語は、その「ロマンス語性」を未だに疑われている興味深いロマンス語、「ロマンス・バルカン混成言語」である。（ロマンス語入門 p.13）

このレポートでは、十位の基数詞に焦点をあて、ロマンス諸語・スラヴ語・バルカン言語連合[1] の中でスラヴ語に属さないモノ、との比較を通じて、ルーマニア語における、スラヴ語の影響の一例を示す。

ルーマニア語とロマンス諸語

先づ、ルーマニア語とロマンス諸語の比較をする。ここで扱うのは、現在国語となったロマンス語及びレト＝ロマンス語、参考としてのラテン語に限定される。

他のロマンス語で 11 - 19は、全て、（16-19 または、17-19 までは、加数法に改まったが）ラテン語の数詞を伝承した。以下:

（比較文法 pp.202-204）

源流のラテン語は

UNDECIM　DUODECIM　TREDECIM　QUATTUORDECIM　QUINDECIM

SEDECIM　SEPTENDECIM

と 11-17までが、乗数法による、数詞構成、(DECIM)

DUODEVIGENTI　UNDEVIGENTI

と 18/19 が、減数法による、数詞構成。

（VIGINTI は 20, DE は分離を示す）

スペイン語・ポルトガル語では、

ス: once doce trece catorce quince
ポ: onze doze treze quatorze quinze
と 11-15 乗数法 (ce / ze が 10)
ス: diez y seis diez y siete diez y ocho diez y nueve
ポ: dezasseis dezassete dezoite dezanove
と 16-19加数法(十の位 + 一の位)(diez / dez[a] が 10)

フランス語・イタリア語・レトロマン語では、

フ: onze douze treize quatorze quinze seize
イ: undici dodici tredici quattordici quindici sedici
レ: endisch dudisch tredisch quitordisch quendisch sedisch
と 11-16 乗数法 (ze / dici / disch が 10)

フ: dix-sept dix-huit dix-neuf
イ: diciassette diciotto dicianove
レ: gissiat shotg scheniv
と 17-19加数法(十の位 + 一の位)
(dix / dici[a] / gis, sh[o/e] が 10)

これ等に対し、ルーマニア語では、前置詞 spre + zece(基数詞の 10)で、十位の基数詞を構成する。尚、前置詞 spre は:

「へ向かって、....の方向へ; ....頃、....近くに; ....のために」

の意。

ルーマニア語の 11 から 19 を示す基数詞は以下の如し：

10 = zece

11 = unsprezece
12 = doisprezece (*m.*)
= douăsprezece (*f. n.*)
13 = treisprezece
14 = paisprezece
15 = cincisprezece
16 = şaisprezece
17 = şaptesprezece
18 = optsprezece
19 = nouăsprezece

cf

1 = unu
2 = doi (*m.n.*)
= două (*f.*)
3 = trei
4 = patru
5 = cinci
6 = şase
7 = şapte
8 = opt
9 = nouă

以上、見ての通り、語源はラテン語である。それでは、この数詞構成法はどこから来るのか。

ルーマニア語とスラヴ語

バルカン半島に行われるスラヴ語は、ブルガリア語、マケドニア語、セルボ＝クロアチア語の三つに代表される。ここでは、ルーマニア語と同じくラテン文字表記である、クロアチア語を例として挙げる。ここで扱うのは、今回サンプルとして調査した、ロシア語、ブルガリア語、マケドニア語(以上キリル文字) / チェコ語、ポーランド語(以上ラテン文字) に限られる。

尚、前置詞 na は:

「....の上へ(対格); .... の上に(前置格) 」

の意。

クロアチア語の 11 から 19 を示す基数詞は以下の如し：

10 = deset

11 = jedanaest
12 = dvanaest

13 = trinaest
14 = četrnaest
15 = petnaest
16 = šesnaest
17 = sedamnaest
18 = osamnaest
19 = devetnaest

cf.

1 = jedan(-no, -na)
2 = dva (*m.n.*)
  = dve (*f.*)
3 = tri
4 = četiri
5 = pet
6 = šest
7 = sedam
8 = osam
9 = devet

以上は例であるが、参考としたスラヴ語全て、表記法の違いこそあれ、前置詞 na で、一の位の数字と十を示す数詞を組み合わせて、 11 から 19 を示す基数詞を構成している。これは、ルーマニア語の数詞の作り方と同じである。それではルーマニアの近隣で、このような数詞構成をしている言語が、他にもあるだろうか。

ルーマニア語とバルカン言語連合

アルバニア語基数詞も 11 から 19 まで 1-9 + mbe(mbë) + dhjetë という形を取り、スラヴ諸語やルーマニア語と同じ構造である。

(mbe は前置詞 mbi:

+ *acc.*「....の上に、の上へ、について、....以上」)

(アルバニア語基礎 1500)

アルバニア語の 11 から 19 を示す基数詞は以下の如し：

10 = dhjetë

11 = njëmbedhjetë	1 = një
12 = dymbëdhjetë	2 = dy
13 = trembëdhjetë	3 = tre(*m.*) .tri(*f.*)
14 = katërmbedhjetë	4 = katër
15 = pesëmbëdhjetë	5 = pesë
16 = gjashtëmbëdhjetë	6 = gjashtë
17 = shtatëmbëdhjetë	7 = shtatë
18 = tetëmbëdhjetë	8 = tetë
19 = nëntëmbëdhjetë	9 = nëntë

印欧語族の一つではあるが同系統の類縁関係にある語を持たず、その意味で独立した言語であるアルバニア語が、十位の数詞構成に関してはスラブ諸語やルーマニア語と、同じ特徴を持つ。このため「スラヴの影響によるバルカン的特徴」が想定出来そうだが、同じバルカン言語連合の近代ギリシャ語が、

11, 12では　1の位の数(無変化) ＋ 10 (deca)
13 - 19では 10 (deca)＋1の位の数(性の一致)

と、独自性を保っているので、さらなる検討が必要と思われる。

結論

ルーマニア語は、他のロマンス語にはみられない「発達した後置定冠詞・消失した不定法・口蓋化」等の特徴をもつ、バルカン半島のロマンス語である。

(ラルース)

そのロマンス語的概観も「広範囲にわたるイタリア語やフランス語やラテン語

からの借用」が与えているのであって、「西欧からの影響が及ぶ前には見られなかったもの」だという。

（ ロマンス語入門 pp. 13-14）

数詞の構成一つの違いで、ルーマニア語のロマンス語としての地位を疑うわけではない。数詞が交易とは切っても切り離せないモノであることから、隣の大国の言語からの影響は、根深いだろう、と推測される。

しかし今回、スラヴ語の影響に関するレポートを書こうとした最大の理由は「ルーマニア語学習に於いて、他のロマンス語からの類推は、

外れる確率が高い」

という事実に悩まされたことである。

確かに、単語の一つ一つはラテン系と思われるのだが、接続法を接続詞を用いて作っているかの様な外観を呈したり、直説法の未来が三種類もあるが全て複合形である等、文法がかなり異なり「本当に、同じ幹から分かれた言葉なのか」と、疑わずにはいられない。最古のルーマニア語文献は 1521 年に現れており、Aurelianus帝が 271年にダキアからローマ人入植者を引き上げさせたといわれる(Eutropius)時から 1250 年も経っている。ダキアの地でその間、ラテン語が保持された保証はないという。

（ ロマンス語入門 p. 13 ）

表題に「スラヴ語の影響」を挙げておいたが、もしかすると、ダキアの言語とラテン語が出会って後、独自に発展した「原ルーマニア語」というものがあり、その中で基本的な単語である数詞だけは、「元の形」が残ったのかもしれない。現在のルーマニア語は「ロマンス諸語の影響」の上に、在るのかもしれない。言葉のロマンである。

注釈

注1. バルカン言語連合とは: 「バルカン半島に行われるブルガリア語、マケドニア語、セルボ＝クロアチア語(以上スラヴ語) 、アルバニア語、ルーマニア語、近代ギリシア語の言語集団。

ギリシャ語の基数詞　（古典ギリシャ語音価でのラテン文字翻字）

10 = deka

11 = endeka	1 = enas (*m.*), mia (*f.*) ena (*n.*)
12 = dodeka	2 = duo
13 = dekatreis(*m.& f.*)	3 = treis (*m.& f.*) tria (*n.*)
14 = dekatessereis(*m.& f.*)	4 = tessereis (*m.& f.*), tessera (*n.*)
15 = dekapente	5 = pente
16 = dekaeksi	6 = eksi
17 = dekaepta	7 = epta
18 = dekaokto	8 = okto
19 = dekaennea	9 = ennea

参考文献　（50音順）

下宮　忠雄:「世界の言語」

（J.デュボワ　他:「ラルース言語学用語辞典」, 大修館書店, 1985, 三版付録）文中の略号（ラルース）

直野　敦:「ルーマニヤ語文法入門」, 大学書林, 1982, 第二版

文中の略号（文法入門）

レベッカ・ポズナー著/ 風間　喜代三・長神　悟　共訳

:「ロマンス語入門」, 大修館書店, 1982

片岡　孝三郎:「ロマンス語比較文法」, 朝日出版社, 1982,

文中の略号（比較文法）

その他

大学書林　「基礎 1500 語」シリーズ

白水社　「エクスプレス」シリーズ